

2020 介護保険 20 年を振り返る

代表理事／小島美里

2020 年が明けました。デイホームえんとグループホームえんが一緒に作った絵馬は、「元気で乗り切る」、「いろいろ楽しいことやりたい」、「私は私！！私なりに」…。最も多いのが「元気で・健康」で、ありきたりでも、書かれた一人ひとりを知る者には胸に響きます。穏やかな一年であることを願っています。

さて、今年は介護保険スタートから 20 年、後退を食い止める運動が予定されています。新年早々の 1 月 14 日、このままだと「制度の持続可能性」の名のもとに高齢者の在宅生活が困難になることを知ってもらおうと、国会集会を急きょ開催しました。介護保険が始まって 20 年、上野千鶴子さんや樋口恵子さんをはじめ、介護職、介護事業者、利用する立場の人々、研究者、ジャーナリストと、多様な人々が一堂に会したのは初めてです。暮らしネット・えんも賛同団体に連なり、リレートークに参加、介護現場の現状を訴えてきました。以下は、小島の発言内容と参加したスタッフの感想です。



『介護保険の後退を絶対に許さない！ 1.14 院内集会』小島発言

NPO 法人 暮らしネット・えんの小島美里です。ボランティアからスタートして 30 年の活動歴がある NPO の代表ですが、介護保険が始まって以来 20 年、気の休まるいとまがない日々を送ってきました。

介護保険のスタート時は、活気がありました。「これからは介護の時代だ！」と。けれども介護報酬が出た時点で訪問ヘルパーの賃金を下げる決断をしました。それまでのままでは経営が成り立たなかったからです。このときの基本報酬がもっとも高いのですから、その後は押して知るべし。

在宅介護に暗雲が立ち込め始めたのは最初の改定から。介護予防が前面に押し出される中、在宅サービスの抑制が進行します。まず訪問介護の生活援助（最初は家事援助）が狙い撃ちされました。家族同居の場合は×、近居でもダメ、といった法律に定めがないルールがまかり通り、働きながら介護する家族から悲鳴が上がりました。その結果、一位の座を通所介護がとってかわったのですが、この時期に増えた小規模デイサービスも近年は報酬が下げられ、撤退・倒産が相次いでいます。在宅三点セットの「福祉用具貸与」も介護保険から外す動きがあって、必死の運動の末何とか食い止めました。「在宅重視」を言いながら、在宅系サービスは大事にされていません。

今、在宅介護の切り札は、小規模多機能型介護などですが、報酬や指定基準が在宅を支えられるものになっていません。基準を超えた人員配置をしても、えんの小規模多機能型では要介護 1, 2 の認知症・独居の利用者さんの服薬や食事、排せつの支援に、四苦八苦です。気のいい事業所の善意に寄り掛かるような制度設計では事業の継